変容する「私」

――梶井基次郎「檸檬」研究の言説から――

西尾　泰貴

はじめに

本論は梶井基次郎「檸檬」の受容に関する研究の一環であり、梶井基次郎の「檸檬」がなぜ梶井の他作品と比べて、高く評価されてきたのか、その理由を明らかにしていく試みである。本論では、「檸檬」における「私」を中心に「檸檬」研究を概観しながら、研究史における「私」像の変遷を追っていく。さらに、「檸檬」のキーワードの一つとされていながら、先行研究において不明瞭なまま論じられていた「えたいの知れない不吉な塊」が、実際には「私」像とともに変容していったことを明らかにする。

これまで拙稿[1]において、先行研究が「檸檬」の評価が高まった理由を、「全集」の刊行によってのみ説明していることを指摘した。その上で、「全集」以外の梶井基次郎作品集としての刊行物のタイトルに着目し、変遷を追った。そこで一九六七年に新潮文庫がそれまで刊行していた『梶井基次郎集』を『檸檬』へと改題して以降、「檸檬」が梶井基次郎の作品集としての刊行物のタイトルに冠せられることが通例化していったことを指摘した。

また、作品集における「檸檬」タイトルの通例化と並行する形で、「檸檬」が習作や草稿との比較検討によって研究されるようになったことを述べた。こうした研究は、一九五九年に刊行された筑摩書房版『梶井基次郎全集』に「檸檬」の草稿や習作が掲載された以降増加していった。

また、拙稿[2]では前述した「檸檬」タイトルの通例化と研究の隆盛とさらにパラレルに、国語教科書の採録数が増加していったことを中心に論じた。拙稿で詳しく論じているが、ここで大まかに、年代ごとの教科書における「檸檬」の設問の変遷を述べておく。

一九五二年、「檸檬」が初めて三省堂の教科書に採録された際、「梶井基次郎について調べ、さらに大正末期から昭和初期頃の日本の文壇（特に小説）のことを調べてみよう」や「このような小説を私小説というが、その理由および特色を考えてみよう」、「私小説などを中心にして、日本の近代小説の特色を研究してみよう」といった作家や文学史に関する問いが中心であった。[3]

一九六〇年代では「その中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。」（一五七ページ8行）とあるが、このときの主人公の気持を想像してみよう」「何かが私を追いたてる。」（一五八ページ14行）とあるが、何が主人公を追いたてているのか考えてみよう」「第一に安静。がらんとして旅館の一室。」（一五七ページ4行）のように、体言で文が終止している例を抜き出し、そのはたらきを考えてみよう」といった、作品の読解を基本とした設問が多く見られるようになった。[4]

一九七〇年以降になると、「檸檬」の設問のほぼ全てが、「「私」は「えたいの知れない不吉な塊」（P74・2）とどのようにして戦おうとしているのか。」「「みすぼらしくて美しいもの」（P74・9）として、どのようなものが挙げられているか。」といった「私」に関する問いへと変化した。[5]このような「私」への焦点化は国語教科書において現在も続いている。

このような問いの設定や採録数増加の理由を、学習指導要領の変遷や同時代の教育におけるモード、国語教科書における「檸檬」の読み方から考察し、「檸檬」の設問が「私」に関する問いへと焦点化していった理由を、「人間形成」という役割が「檸檬」に担わされていったためであることを明らかにした。

本論の第一節では「檸檬」発表当時（一九二五年）、「私」が「インテリ」として読まれていた可能性を同時代評と当時の文学状況から示す。第二節では、プロレタリア文学が衰退した一九三五年以降、「私」を「梶井基次郎」とする読

み方と、「文士」とする読み方がパラレルに存在していたことを研究から明らかにし、第三節では「えたいの知れない不吉な塊」の読み方が「私」像の変遷とともに、変化していったことを指摘する。そして、第四節では一九七〇年代以降、「えたいの知れない不吉な塊」が抽象化していき、同様に「私」像も「青年」へと抽象化されていったことを明らかにする。

一、インテリゲンチャとしての「私」

前述した通り、国語教科書において「檸檬」の設問は、次第に「私」へと焦点化されていった。では研究史において「檸檬」の「私」はどのような変遷を辿っていったのだろうか。

「檸檬」において、「私」がフォーカスされる理由はいくつかある。一つは、この小説が、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた」という一文から始まる、一人称形式の小説であるという点だ。

特に研究史上では私小説であるか否か、という論議が盛んであった。日沼倫太郎は梶井基次郎を私小説家であるという潮流に対し、「私小説作家として」見なされているが「断じて現実再現型すなわち自然主義文学の系列に属する作家ではない」と述べている。さらに、梶井を「主情的な作家」ではなく「認識による作家」とした。その上で「檸檬」も私小説ではなく「認識」によって書かれた小説である、と結論づけている。[6]

ここであらかじめ明記しておくが、本論では「檸檬」が「私小説」であるか否か、という考察は行わない。日比嘉高の『〈自己表象〉の文学史――自分を書く小説の登場――』[7]や、山口直孝の『「私」を語る小説の誕生――近松秋江・志賀直哉の出発期』[8]において述べられている通り、「私小説」というワード自体が抽象化された曖昧な言葉であり（そのため、日比や山口も「私小説」という言葉を使わず、「自己表象」という言葉を用いている）、私小説であるか否かという検証は、鷺只雄が一九九九年、『『檸檬』』において「梶井は私小説作家であるかどうかという議論が早くからあって現在まで続いている」[9]と述べているように、「檸檬」の研究史を俯瞰してみても、明確な答えを見出せていないままである。

しかし、ここであえて、「檸檬」が私小説であるかどうかが論じられてきたことを取り上げたのは、私小説として、あるいは私小説を否定する形で「檸檬」の研究は行われてきた、という研究史における流れを把握しておくことが重要であるからだ。

つまり、私小説として認識される、あるいはそういった形式を持つ小説である「檸檬」は、主人公、または一人称の語り手としても捉えられる「私」を中心とした研究が行われる場合が多い、ということである。

そこで本論では私小説であるかという検証ではなく、「檸檬」の研究史上において「私」がどのように語られてきたか、言い換えれば「私」像がどのように変遷していったのかを概観していきたい。現在の教科書では「檸檬」の「私」は、学習者との心的距離が近い非常に幅の広い「青年」として想定され、扱われているが、果たして、「檸檬」研究においても同様の「私」像が想定されているのであろうか。

同時代評ではあまり注視されていなかった「檸檬」だったが、近藤一郎は一九三一年に「梶井君の檸檬」の中で次のような評を述べている。

「檸檬」――知識人に時どき起こる深い憂鬱の谷間。それは駆け出しのマルクシストが「没落資本主義第三期に於けるインテリの特質」だと簡単に片付けるものとは、また性質の全然に異なるものだ。

憂鬱の内容が、読者に背を向けてゐるので、或いは没落に瀕したインテリの悲哀だと頭からやられないとも限らないスキが発見できる。[10]

評としては印象批評に近いものであるが、ここで示されている「私」像は注目すべきだろう。ここでは、「檸檬」の「私」は、一般的には「憂鬱を抱えたインテリ、知識人」と読まれるであろう、ということが示されている。また、「檸檬」の同時代評は少ないため、当時の文学状況から「檸檬」の「私」がどのように読まれていたのかを想定してみよう。一九三三年のものだが、深田久弥は次のような批判を同時代の小説全般に対して行っている。

インテリの苦悩を描け、という声が申し合はせた様に叫ばれる。しかしその現はれたものを見ると、多くはただ左翼へ行かうか行くまいかといふ感傷的な迷ひや、大学は出たが職がなくその日の暮らしに困るといふ世俗的な苦しみなどであつて、未だインテリの知識の苦悩を真に描いたものは殆どないと云つていい。[11]

深田の批判から、一九三〇年初めの小説には「インテリの苦悩を描く」ことが期待されていた流れがあったことが分かるだろう。松本和也はこれらの批判から、「檸檬」が発表された大正末期は「“知識人青年の苦悩”が同時代的課題と切り結びながら純文学の主題として浮上しつつある時期」であった、と述べている。[12]

このような同時代の評や状況から、発表当時の「檸檬」の「私」は、現在の教科書における「青年」とは異なる、「知識人青年」として読まれていたと考えて良いだろう。現代の「青年」と異なる、あくまで「インテリゲンチャに属する青年」として読まれていたのである。

もちろんこのように単純に「インテリ」として「私」を設定することは難しいだろう。しかし、近藤が「不思議な明暗神経」を抱えた「大人の大学生」である「私」を想定し、抱えている「憂鬱」が「読者に背を向けてゐる」ために、「インテリの悲哀」として読まれることをある程度回避しているのではないか、と述べているこのような批判自体が、「私」を「インテリ」として想定する読み方があったことを示している、と考えて良いだろう。

加えて、「檸檬」ではないが、梶井の「或る崖上の感情」という作品に対して、匿名で『大学左派』の「同人雑誌短評　其の一」において、「変な安つぽい無常主義しか響いては来ない。吾々はさうした無常感に安住してゐる梶井氏の境地を嗤うと共に、積極的に生きることを切に希望する」[13]という批判が行われていたことも、当時の小説全般に対して、「私」＝「インテリ」「知識人青年」という読まれ方が、ある程度成立していたことからも裏付けられるだろう。

二、「梶井基次郎」・「文士」としての「私」

昭和一〇年代、一九三五年以降になるとプロレタリア文

学の衰退もあり、「インテリ」として「私」を読む言説は見られなくなってくる。「私」＝「インテリ」「知識人青年」という構図の読まれ方はあまり見られなくなった。

では「インテリ」や「知識人青年」として読まれなくなった「私」は、どのように読まれるようになっていったのだろうか。

梶井は死後、『作品』[14]の「梶井基次郎追悼號」をはじめとして、多くの特集が組まれていくことになる。そのような死後の特集の中で、梶井と親交があり同人雑誌「青空」をともに創刊した淀野隆三や中谷孝雄など、多くの人物によって梶井との思い出だけでなく、趣味嗜好や病の様子、生涯が語られるようになってくる。つまり、梶井の「作家情報」が幾度も語られるようになっていったのである。

さらに戦後になると、筑摩書房版『梶井基次郎全集』の淀野隆三による梶井の「年譜」が掲載され、より多くの読者へと「梶井基次郎」の「作家情報」が、まとまった形で受容されるようになっていく。そして、作家情報と、習作や草稿が絡む形で「檸檬」は研究されていくこととなった。

また、筑摩書房版全集の刊行後、梶井基次郎の作家情報と習作や草稿から「檸檬」を読む手法、いわゆる「資質還元主義」的な読まれ方が行われ始める。そして、「資質還元主義」的な、作家に依拠した読み方からは、多くの場合「私」＝「梶井基次郎」という読まれ方の構図が浮かび上がってくるのである。

「私＝梶井基次郎」という読まれ方の代表的なものとして、大谷晃一の「梶井基次郎『檸檬』」を挙げる。

> 作者は常に何か昂奮することを愛した。その陶酔がいくつかの現実に、たびたび醒める。醒めてはまた昂奮を見つける。不吉な塊とは、そのいくつかの現実が作者の下意識の中にひそんだ嫌悪と焦燥ではなかったか。
>
> 私もさっき買った檸檬を画集の棚に置いて帰りたい誘惑にかられた。あたりを見廻している。だが、実行できなかった。作者のような不吉な塊や倦怠がないせいなのか。その心のように、純粋で野性的で豊かでないゆえなのか。[15]

大谷は「えたいの知れない不吉な塊」を抱えている「私」

は「作者」、つまり「梶井基次郎」であるとして、「檸檬」を読んでいることが分かるだろう。

さらにその後、中谷孝雄『梶井基次郎』[16]や鈴木沙那美『転位する魂　梶井基次郎』[17]、大谷晃一『評伝梶井基次郎』[18]などにより作家情報が追加され、整理され、受容されていくことになる。このような作家情報の強化に加え、習作と草稿との比較検討による「資質還元主義」的な読まれ方が研究上で主流となり、再生産されていったことにより、「私」＝「梶井基次郎」という構図もまた、再生産され、強化されるようになっていったのである。

「私」を「梶井基次郎」とする読み方がある一方で、磯貝英夫は一九六二年に次のように述べている。

つまるところ、「不吉な塊」とは、暗い、いらだちに満ちた、虚無的感覚であり、その根源には、個人の生活的、肉体的条件をさらにこえて、自我と社会（日常、現実）との非適合があると言ってよく、それをもたらしたものは、一つには、過敏な感受性であり、一つには時代だということができる。大正末年代という時代が、多くの知識人たちを、崩壊感もしくは焦燥感におちいらせたことについては、いくらでも事例をあげることができるし、その原因を社会学的に説明することもできるが、それは、今日的な疎外状況からもおおよそ類推できるだろう。その上に、この青年に作用しているのは、大正後期に一般化した、ニヒルとデカダンスを地色とする文士気質の伝統[19]であると思われる。

また、伊藤整は一九六九年に「梶井基次郎」において次のように述べている。

梶井の初期の作品を読むと、神経過敏さや、倦怠感などのためにこ行動的になることを自ら封じてゐる青年の気分を写さうとした習作的なものが目立つてゐる。「檸檬」の冒頭、「泥濘」、「過古」等には、共通してそれが描かれてゐる。そしてこのやむを得ぬ倦怠感なるものは、実に大正期の知識階級、特に文士の日常の、むしろ定型といつていいほどの心的状態であつた。その倦怠と無為の中から突然または徐々に、ある事件が描き出さ

れるのが、多くの私小説の定型であった。[20]

これらの評からは同時代において読まれていた「知識人青年」を、さらに限定的にした形である「文士」として、「私」が読まれていることが分かるだろう。前述したような「私」を「梶井基次郎」とする読み方から考えると、「梶井基次郎」という作家個人から「小説家」という性質を抜き出し、より一般化した「文士」として「私」を読んでいるのだ。

このような「私」の拡張は、「えたいの知れない不吉な塊」の読まれ方にも影響を与えている。「えたいの知れない不吉な塊」は、「私」＝「梶井基次郎」という読まれ方の構図において、小林秀雄が「氏（論者注：梶井基次郎）の焦燥は知的といふよりも鋭敏な感受性が強ひられた一種の胸苦しさである」[21]とし、前述した大谷が「不吉な塊とは、そのいくつかの現実が作者の下意識の中にひそんだ嫌悪と焦燥ではなかったか」[22]としているように、梶井の資質に回収されるものとして読まれることになる。つまり、「えたいの知れない不吉な塊」は梶井個人が抱えている「嫌悪」や「焦燥」として読まれていたのだ。

しかし、「私」＝「文士」として読まれる場合、「えたいの知れない不吉な塊」は「梶井」ではなく当時の「文士」が抱えているものとなる。磯貝や伊藤が大正の末期、当時の時代背景に起因する「暗い、いらだちに満ちた、虚無的感覚」、「定型といっていいほどの心的状態」としたように、梶井個人の「嫌悪」や「焦燥」ではなく、当時の「文士」が皆抱えていた「倦怠」「デカダンス」として、「えたいの知れない不吉な塊」は意味を変容していく。「私」の意味が梶井基次郎個人から「文士」へと拡張されると同時に、「えたいの知れない不吉な塊」もまた、拡張されていったのである。

三、変容する「えたいの知れない不吉な塊」

先に述べたような「えたいの知れない不吉な塊」を「梶井」の資質に還元する読み方と、当時の「文士」が共有していたものだったとする読み方は、「檸檬」研究の主な読み方として続いていくこととなる。前者であれば、梶井の三

高時代の実生活から検証したものとして先にも述べた中谷孝雄や大谷晃一による評伝なども挙げられる。

一九八五年に三好行雄はこれらの読み方を「従来の論」であるとし、二節で挙げた伊藤整の論を「デカダンスや倦怠を単に作者の資質や病気に帰するのではなく、同時代の、とくに若い知識世代の精神の共通項として理解しておくことが、梶井基次郎論の新しい視野を開くことになるはずである」と延べ、「新しい視点」として紹介している。[23]

そうした「新しい視点」として「私」＝「文士」という読まれ方が登場する中で、宮内豊は一九六九年に「檸檬と爆弾」の中で、「えたいの知れない不吉な塊」を次のように述べている。

主人公は「えたいの知れない不吉な塊」というがごとき、それこそえたいの知れないフィクションに悩まされているのではなく、度かさなる飲酒放蕩、放擲した学業、堆積する借金というまったく現実的かつ具体的な問題に由来する〈不安〉に苦しんでいるのである。[24]

この論の冒頭において、宮内は河上徹太郎[25]や小島信夫[26]による梶井の資質へと還元していく論を、「えたいの知れない不吉な塊」が〈倦怠〉という抽象的な言葉に回収されていってしまうという点で批判している。その上で、「檸檬」研究の主流である習作や草稿との比較検討を避け、テクストのみで「えたいの知れない不吉な塊」を考察している。鈴木貞美はこの論を、「「檸檬」の精神の特質を、しばしば梶井作品群の全体について述べられてきた「倦怠」ではなく、「不安」に特定」したと評している。[27]

古関章は、先に述べた小林秀雄[28]や「えたいの知れない不吉な塊」を「精神と肉体との狭間に在って別個に独立し、その両者を痛めつける生理的病患のような存在」[29]と述べた濱川勝彦による資質還元主義的な読み方を批判し、前述の宮内の論を「確かに傾聴すべきものがあった」としつつも「だが、私にはこれらの論はあまりにも平板な「不吉な塊」の捉え方になりすぎていると思えてならない」と反論している。[30]

古関自身は磯貝英夫による「結核や神経衰弱、さらには大正年末の混乱した社会状況」を「因子」とした「虚無的

感覚」とする論を「均整がとれていた」として積極的に評価した。その上で、「瀬山の話」との比較から「えたいの知れない不吉な塊」を次のように述べている。

「何か」わけの分からない青年期の生の不安に、肉体と精神の病いという内部世界の要因と、時代の病弊という外部世界の要因とを絡み合わせたものから沸き立つ抽象観念であり、ほぼ「瀬山の話」から帰納した「不吉な塊」と径庭のない内実を示していると見なして良かったのである。

梶井が「檸檬」で発見したものは、青年期の生の不安や胸苦しさといった憂悶を美的カタルシスにより美意識の世界に解消してゆく変換のメカニズムだったということになる。[31]

このような、「えたいの知れない不吉な塊」を青年の不安とする読み方をしているのは古関だけではない。鷺只雄も先の宮内の論に対して、「まさに出るべくして出たレモンジュースの如き爽快さ」がある論だと評価しつつも、「それが全てかと問われればノーというほかはない」とし、「何故なら、それらは「不吉な塊」の具体的な原因であり、現実的な中味ではあっても、結果ではない」としている。その上で次のように述べている。

換言すれば「檸檬」が何故多くの若者たちの支持を得、青春の文学として評価されるかと言えばそれは恐らく次のようなところにあるといってよいのではないかと私は思う。

一つには青春の未熟さである。飲酒・借金・怠学・不摂生ゆえの病気等々、これらはいずれも度を越したり、繰り返すことは有害であり、挫折や破滅をもたらすものであることは百も承知でありながら、心弱くも悪習との腐れ縁を断ち切れずにずるずると引き回されている不甲斐なさである。これは若者の誰でもが経験するところに違いない。[32]

鷺はさらに未熟さ故の不安と時代の不安によって「不吉

な塊」は完成し、青年は自身の「生の不安」や「青年の不安」を読んでいる、としている。

鷺のスタンスは古関と非常に近似しており、「えたいの知れない不吉な塊」を「青春の未熟さ」と「青年の不安」と「時代的な不安」によって完成するものだとしている点もかなり似通っている。加えて、両者ともに「梶井基次郎」という作者に還元することを避けている。

以上の論を辿っていくと、「えたいの知れない不吉な塊」は、「檸檬」研究において、鷺只雄の言葉を借りるならば「生の不安・社会的不安・時代的不安・青春の鬱屈苦悶・倦怠・病的（肺結核）不安・世紀末的デカダンス等々があり、その実体は作品の中であいまいなままに放置されて、追求はされていない」[33]のである。つまり、未だに文字通り、「えたいの知れない」ものとされていることが分かるだろう。

四、「青年」へと抽象化される「私」

「えたいの知れない不吉な塊」は研究史上でも明確な答えを見出だせないまま、多くの研究によって語られてきたことは鷺の指摘通りである。ただし、「えたいの知れない不吉な塊」の読み方には、多くの研究において共通している点がある。それは、「焦燥」や「倦怠」、「不安」といった、抽象度の高い言葉へと回収されていっているという点だ。

研究史を俯瞰すると、「えたいの知れない不吉な塊」の主体、つまり「私」像の変容によって「えたいの知れない不吉な塊」の読まれ方もまた、変化していることが分かるだろう。「私」＝「知識人青年」という読まれ方では「えたいの知れない不吉な塊」は「インテリの悲哀や苦悩」となる。そして、「私」＝「梶井基次郎」という読まれ方では、「作者の焦燥や嫌悪」であり、「私」＝「文士」では「文士の倦怠、デカダンス」として読まれているのだ。明確に異なるものではないが、「私」像の違いによって、「えたいの知れない不吉な塊」には、確かな差異があるといっていいだろう。

さらに、宮内のようなテクスト論的な読み方においては、「えたいの知れない不吉な塊」はまた違った意味へと変容する。作家情報を意図的に切断したテクスト論的な読み方の中では、「えたいの知れない不吉な塊」は、宮内の指摘通

りテクスト内部で読むことができる「度かさなる飲酒放蕩、放擲した学業、堆積する借金というまったく現実的かつ具体的な問題」として読むことができるだろう。

ただし、テクストのみで考察した宮内の「度かさなる飲酒放蕩、放擲した学業、堆積する借金というまったく現実的かつ具体的な問題」は古関や鷺によると「平板」であり、単純なものとされてしまう。その「平板」さ、あるいは単純さを避けるために、テクスト内で読むことができる「具体的な問題」を再び抽象化し、「えたいの知れない不吉な塊」は「不安」や「憂鬱」として読まれるようになっていった。

「私」を「梶井基次郎」、あるいは「文士」とする読み方同様、抽象度の高い言葉である「不安」や「憂鬱」へと変化した「えたいの知れない不吉な塊」ではあるが、古関や鷺の論において、「私」を「梶井基次郎」や「文士」とはしていない。つまり、具体的な主体を失っているのである。

そこで「不安」や「憂鬱」を抱える人物、「私」という主体を改めて想定した結果、「私」は、梶井個人や同時代のインテリ、文士ではなく、一般的な「青年」へと変容していった。抽象化していった「えたいの知れない不吉な塊」とパラレルに、「私」像もまた、「青年」へと抽象化していったのである。

この「私」の抽象化こそが、二章で述べた教科書における「私」への焦点化の一つの答えとなるだろう。具体的な「私」ではなく、一般的な、学習者と近しい距離を持つ「青年」として読むことが出来るようになったがゆえに、「私」を対象化し、人間形成を促進させる教材として、採録数が増えていったのだ。

ただし、教科書が研究と同様に「私」を「青年」として読む一方で、「檸檬」の読み方、具体的には「憂鬱からの解放」という読み方において、両者の間にはズレが生じていくことになる。

七〇年代の教科書には「「画本」の「城壁の頂におそるおそる檸檬をすえつけ」（P81・3）ることによって、「憂鬱」から抜け出すことができたのは、どのような心の働きによるものか、あとづけてみよう」[34]や「「私」は「憂鬱」から、何によって、どのように解放されたか。また、それまでの「私」の心理や行動であとづけよう」[35]といった問いが設定されていた。つまり、七〇年代の教科書では「檸檬」

を、研究を反映しながら、「私」が「憂鬱」から解放されていく作品として読んでいる。

これらの設問が削除され、「憂鬱」からの解放に重点を置かない教科書における読み方は八〇年代から始まる。しかし、一九八四年の古関の論では「「私」の現実的苦渋を精神的カタルシス効果で救抜する過程を描いた」[36]としており、一九九九年の鷺の論においても「たった一顆のレモンによって「私」を圧迫し続けていた「不吉な塊」は弛緩し、しつこい「憂鬱」からは解放され、「幸福」を実感する」[37]と述べられている。また、鈴木貞美も二〇〇二年に、「檸檬」を「一個のレモンとの出会いによって憂鬱がすっかり晴れた」「憂さ晴らしのテーマ」がある小説として読んでいる。[38]つまり、研究の中では「憂鬱」からの「救抜」、あるいは「解放」といった読み方が続いていったのだ。

以上を整理すると、「憂鬱」を抱えた青年、「不安」を抱えた青年という「私」像は、「檸檬」研究と「檸檬」研究を参考にしている国語教科書によって、相互的に紡がれていった、と言えるだろう。しかし、研究において、「私」が「憂鬱」から解放された読み方は続いていったにも関わらず、あえて教科書では「私」は「憂鬱」から解放されたかどうかは、明記されないようになっていったのである。

おわりに

本論では「檸檬」の「私」像の研究史上の変遷を追い、「私」の変容とともに「えたいの知れない不吉な塊」も変容し、「えたいの知れない不吉な塊」が「憂鬱」や「不安」といった抽象的な言葉になった結果として「私」像も「青年」へと抽象化していったことを述べた。また、「私」を「青年」とする読み方は研究と教科書、両者が相互的に紡いでいった一方で、「青年」が「憂鬱」から解放されたかどうかに関して、両者の間にはズレが生じていったことを指摘した。

しかし、本論には多くの課題が残されている。一つは、研究を概観するため、「私」の読み方のカテゴライズがかなり大まかなものになってしまった点である。例えば「私」を「梶井基次郎」として読む場合でも各論には差異がある。本論では研究史を大きく捉えるため、細かな差異に着目し

つつ論ずることができなかった。

また、研究と教科書の二つのみに焦点化した結果として、「私」像が「青年」へと抽象化していったことを指摘するに留まってしまった。本論で扱った各年代のメディアや文学状況から、より具体的な「青年」像を捉えていくことは、大きな課題である。

［注］

1　「梶井基次郎作品の受容について　『檸檬』刊行形態と評価の変遷」（『リテラシー史研究　第九号』二〇一六年）

2　「「檸檬」の受容論―教科書掲載を視座として―」（『リテラシー史研究　第一〇号』二〇一七年）

3　『新国語（改訂版）文学三』（一九五二年、三省堂）

4　『国語　現代編三』（一九六五年、秀英出版）

5　『新訂版　現代国語三』（一九七二年、大日本図書）

6　日沼倫太郎「梶井基次郎」（『現代作家論』一九六六年、南北社）

7　日比嘉高『〈自己表象〉の文学史――自分を書く小説の登場――』（二〇〇二年、翰林書房）

8　山口直孝『「私」を語る小説の誕生――近松秋江・志賀直哉の出発期』（二〇一一年、翰林書房）

9　鷲只雄「『檸檬』」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九九年）

10　近藤一郎「梶井君の檸檬」（『新文學研究』一九三一年七月号、金星堂）

11　深田久弥「純文学の更正」（『新潮』一九三三年七月号）

12　松本和也「第一章　〈苦悩する作家〉の文壇登場期――メディアの中の作品評・失踪事件」（『昭和十年前後の太宰治〈青年〉・メディア・テクスト』二〇〇九年、ひつじ書房）初出は「ある新進作家の文壇登場期――〈太宰治〉をめぐって――」（『立教大学日本文学』二〇〇一年）

13　匿名「同人雑誌短評　其の一」（『大學左派』一九二八年、大學左派編輯所）

14　『作品』五月号（一九三二年、作品社）

15　大谷晃一「梶井基次郎『檸檬』」（『続関西名作の風土』一九七一年、創元社）

16　中谷孝雄『梶井基次郎』（一九五一年、筑摩書房）

17　鈴木沙那美『転位する魂　梶井基次郎』（一九七七年、社会思想社）

18　大谷晃一『評伝梶井基次郎』（一九七八年、河出書房新社）
19　磯貝英夫「梶井基次郎・檸檬」（『現代日本文学講座　小説6』一九六二年、三省堂）
20　伊藤整「梶井基次郎」（『日本現代文学全集』第八二巻解説、一九六四年、講談社）
21　小林秀雄「文芸時評――梶井基次郎と嘉村礒多」（『中央公論』、一九三二年、中央公論社）
22　大谷晃一『評伝梶井基次郎』（一九七八年、河出書房新社）
23　三好行雄「梶井基次郎作家論作品論辞典」（『國文學　解釈と教材の研究』昭和六三年十二月号、一九八八年、學燈社）
24　宮内豊「檸檬と爆弾」（『早稲田文学』一九六九年）
25　河上徹太郎「梶井文学の近代性」（『梶本次郎全集』第一巻月報、一九五九年、筑摩書房）
26　小島信夫「病者の心理と健康の文学」（福永武彦編『近代文学鑑賞講座　第18巻　中島敦・梶井基次郎』一九五九年、角川書店）
27　鈴木貞美「解説」（『梶井基次郎『檸檬』作品論集　近代文学作品論集成⑫』二〇〇二年、クレス出版）
28　小林秀雄「文芸時評――梶井基次郎と嘉村礒多」（『中央公論』、一九三二年、中央公論社）
29　濱川勝彦「『檸檬』鑑賞」（『鑑賞日本現代文学第一七巻　梶井基次郎・中島敦』一九八一年、角川書店）
30　古関章「美的自己慰安の文学「檸檬」」（熊本近代文学研究会編『方位』第八号、一九八四年）
31　古関章「美的自己慰安の文学「檸檬」」（熊本近代文学研究会編『方位』第八号、一九八四年）
32　鷺只雄「『檸檬』」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九九年）
33　鷺只雄「『檸檬』」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九九年）
34　『新訂版　現代国語三』（一九七二年、大日本図書）
35　『現代国語　二』（一九七三年、教育出版）
36　古関章「美的自己慰安の文学「檸檬」」（熊本近代文学研究会編『方位』第八号、一九八四年）
37　鷺只雄「『檸檬』」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九九年）
38　鈴木貞美「『檸檬』――その魅力と表現方法、文芸史的位置の解明のために」（『梶井基次郎『檸檬』作品論集　近代文学

作品論集成⑫』二〇〇二年、クレス出版）。『梶井基次郎の世界』二〇〇一年、作品社「研究の目的と方法」二、三を編集したもの。